

クリスタル・イーストマンと グリニッジ・ヴィレッジフェミニズム

栗原涼子

Crystal Eastman and Greenwich Village Feminism

Ryoko KURIHARA

This paper analyzes the theory of Greenwich Village feminism and also that of Crystal Eastman. First, I will discuss how the bohemian community was build up during 1910s. Next, my focus will be on the issue of free speech and the significance of the publication of the 'Masses', which represents the Village's thinkings on radicalism and feminism. Then, I will take up the issue of feminism, focusing on suffrage, sexuality, marriage and love. In the last part, I will discuss the ideas of Christal Eastman : her thoughts on gender role, her involvement with working women's condition, woman suffrage, the peace movement, the Equal Right Amendment and her sympathy with the international socialist movement will be my concerns. Greenwich Village in the 1910s was a unique community where feminists worked to achieve a broader and more comprehensive programs than was advocated by suffragists and reformers.

1 はじめに —ボヘミアン・コミュニティの成立

本稿は1910年代のニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジにおいて展開された革新的なフェミニズムの意義について考察するものである。フリースピーチ運動と雑誌『マース』(Masses)の中でフェミニズムがいかに論じられたかを取り上げ、女性参政権、セクシュアリティに関する言説についても考察したい。また、クリスタル・イーストマン(Crystal Eastman)の思想に注目することにより、ヴィレッジフェミニズムがコミュニティ内部に留まらず、社会変革の思想として社会主義、議会制民主主義とどのように対峙していたかについても検討したい。

ボヘミアンコミュニティの成立は1890年代に遡る。当時、多才な芸術家たちがニューヨークのローアーストサイドに集い、アメリカのメインストリームからやや離れた新しい生活スタイルを営み、自由な文化を築き上げた。「ボヘミア」はもともと男性中心のコミュニティであったが、多くの伝統的な家庭観を持たない「新しい女」と呼ばれた女性たちもこの地に魅了された。19世紀末に彼女たちは「女性文化」を開花させる旗手と

なった。新しい女の中には中産階級の高等教育を受けた女性以外にアナーキストのエンマ・ゴールドマン(Emma Goldman)のような移民者も含まれる。中西部からハーヴァード大学を経てヴィレッジに移住した『コマーシャル・アドヴァタイザー』(Commercial Advertiser)誌のレポーターのハッチンズ・ハップゴッド(Hutchins Hapgood)によれば、ヴィレッジは「ビジネスや専門職を好まず、自由な芸術や文化に魅せられた男女が自らの夢をかなえるべく集った場」であった¹⁾。ヴィレッジは社会主義、ポピュリズム、サンディカリズム(直接行動に訴える労働組合主義)など当時の革新主義を論議する場であり、中産階級と労働者階級の男女が政治的行動に訴えるのではなく、議論を深め、文化を形成する場となったのである。むろん、アメリカには多くのボヘミアンコミュニティが存在した。しかし、1910年代のニューヨークはその中心的な位置を確立した。

「新しい女」の中でもクリスタル・イーストマンは終生、フェミニズム、平和運動、社会主義に関わり続け異彩を放っている。ヘンリエッタ・ロッドマン(Henrietta Rodaman)、アイダ・ロー(Ida Rauh)、アイネッツ・

ミルホランド (Inez Millholland) らの名も忘れてはならない。セツルメント運動で活躍した改革者もヴィレッジに参加した。1910年頃にはセツルメントハウスは全米で400余り存在した。ニューヨーク、シカゴのような都市では中産階級が労働者を支援し、キリスト教的な慈善を越えて組織化し、階級を統合する運動を形成するようになった。この変化は急激なものであり、旧世代の想像をはるかに越えるものであった。タバコ製造業の労働者女性、ローズ・パストア (Rose Pastor) とイェール大学出身のグラハム・ストークス (Graham Stokes) との結婚はセンセーショナルな事件であった。しかし、ヴィレッジコミュニティも黒人やネイティブアメリカンには寛容であったとは言い難い。『マース』の執筆者でネイティブアメリカンのハバート・ハリソン (Hubert Harrison) は例外的な存在であったが、彼とて人種差別主義を乗り越えることができないヴィレッジを去った。ニューヨーク市の黒人の数は少なく、黒人問題は南部の問題として片づけられたことが人種による区別の解消につながらなかった一つの原因である。労働問題が激しく論じられたこの時代に黒人の問題は北東部ではさほど注目されなかった。

2 フリースピーチ運動

フリースピーチ運動は社会主義者、労働運動家のみならず一般の中産階級の人々に浸透し、リベラル、ラディカルを問わず変革を求めるアメリカ人の共通の目標となった。政府の介入を否定し、表現の自由を求める動きは極めてアメリカ的な民主主義に立脚するものであるが、この動きが階級を越えたことは意義がある。運動は1873年に成立した猥褻物取締法であるコムストック法への批判に端を発する。その後、富裕な宗教家、パーシー・グラント (Percy Grant) と法律家を中心となってフリースピーチ連盟 (Free Speech League) が結成され、法整備が検討された。グリニッジ・ヴィレッジにおいてはフロイド・デル (Floyd Dell) が自由恋愛主義思想に基づいて、いかなる見解であれ表現の自由はあるべきと主張した。アナーキストのエンマ・ゴールドマンは、アナキズムに賛同する人々を罰するニューヨーク法を批判し、フリースピーチ連盟に投じられた資金が富裕層のためにも使用されないかと危惧した。そして、フリースピーチに関する議論を積み重ねていく中で、法整備を説くリベラル派とそのことが女性を含むマイノリティー差別につながることを懸念した革新主義者との間の溝が深まった。たとえばヴィレッジの女性活動家のヘンリエッタ・ロッダマンは1912年、女性のみが雇用者に結婚届を提出する事を要求しているニューヨーク州法の規定に反対す

るキャンペーンを張った。フリースピーチ連盟のメンバーである彼女の行動は彼女が自由恋愛主義者であるがゆえにスキャンダルとして報じられた²⁾。1910年にパーシー・グラントが組織したリベラルクラブ (Liberal Club) は産業労働組合 (Industrial Workers World 以下 I WW と略す) 会員や社会主義者を会員とする革新的な団体であったが、フェミニストの支持を得てその拠点をワシントンスクエアからヴィレッジに移した。マーガレット・サンガー (Margaret Sanger) も1916年にその会員となる。ヴィクトリア朝のモラルを否定し、男女がセクシュアリティーについて本音で論じ合う場が生まれはしたが、そのことが直ちにジェンダー役割の解体につながったわけではなかった。女性は常に「よい聞き手」であることを求められたのである。女性のみによるクラブ「ヘテロドクシー」(Heterodoxy) が結成された理由がここにある。サンフランシスコ出身のジャーナリスト、アイネツ・ヘイネス・アーウィン (Inez Haynes Irwin) はヘテロドクシーを「初のクラブ、義務も義理もいらぬ。女性がすべてを語り、あらゆる意見を述べることができる」と称した³⁾。わずかな黒人女性がここに参加し、男性は時にスピーカーとして参加している。リーダーを持たない自由な場を女性は求めた。

一方、1911年、ローアーイーストサイドのフェラーセンターでアナーキスト、社会主義者によるレクチャーや演劇、政治集会、学習会が持たれたこともフリースピーチとの関係で注目されよう。フェラーセンターでの活動は内容的にはセツルメント活動とも類似性があるが、セツルメントハウス運動との相違は、移民者が主体であったことにある。また、1912年、マベル・ドジェ (Mabel Dodge) は多くのアーティストの協力を得てかつての上流階級のサロンをフリースピーチのグループの集会所に作り替えた。黒人を除く多くの人々、I WW 会員、産児制限運動家、新聞記者、精神分析医、芸術家、女性クラブ員、主婦などが集合した。ドジェの個性を反映し、女性クラブ員や主婦をも含んでいたために、あくまで上品であるべきという不文律がここにはあった。当然のことながら、革新主義者はこうした態度には批判的であった。とはいえ、ドジェは女性参政権を初めとする政治社会の問題に深い関心を示し、エンマ・ゴールドマンを恐れつつ、あこがれ、自ら「危険な女」を演じたかっただけである。「エンマとその仲間・・・私は過激な役を演じたい。危険なものでありたい。しかし、時に私はそれを恐れ」とは彼女の言葉である⁴⁾。1910年代のヴィレッジはフェミニズム、フリースピーチが革新主義と結びついた幸運な時代であった。ネットワーク型のフェミニズム思想、社会主義思想は1930年には強力なピラミット型の政

府と左翼共産党の存在に分断されていく。ヴィレッジの実験は夢であった。

3 『マース』の発刊

1890年代からボヘミアンが労働運動などの左翼運動とも関わり、芸術家が労働者のヒーローないしヒロインとなりうる状況が生まれた。芸術と人生について論じ、当時、最もポピュラーとなった雑誌が『マース』である。1912年に創刊され、1918年に政府の圧力により廃刊となる短期間に、アメリカの革新性を体現し、ヨーロッパの政治思想を紹介し、アメリカ社会制度を皮肉り、明るく大らかにウィルソン流の理想主義と対峙した雑誌が『マース』である。その特徴の一つは無垢なまでの自らへの信頼である。改革への道を歩みつつ、彼らは社会主義政府の実現は間近であると信じた。作家のジョン・リード（John Reed）は『マース』の創刊の目的を「古いシステム、古いモラル、古い偏見を徹底的に攻撃する・・・そして新しいシステムを作る。社会改革の唯一の信条や理論に拘束されず、革新的なものであれば何でも取り上げる。」と述べている⁵⁾。ここには1930年代の左翼知識人が持つイデオロギーはない。個々人の良識や道徳が国家を変革できるという素朴さがある。彼らのレトリックは19世紀の奴隷制廃止論者のそれに近い。『マース』は1911年、オランダからの移民である社会主義者パイエット・ブラグ（Piet Vlag）により創刊された社会主義雑誌である。社会党員にのみ配布されていたが、マンハッタンに済むライター、アーティストからの支持を得、画家のアート・ヤング（Art Young）も加わり、さらにマックス・イーストマン（Max Eastman）が無給で編集者となったことがその性格を決定づけた。

1912年、マックス・イーストマンは「マースの編集者に選ばれました。無給です」という電報を受け取った。編集能力以上に彼が人々を引きつけたのはその美貌と知性である。フロイド・デルが実務を担い、イーストマンは政治姿勢に集中した。しかし、いくつかの矛盾が隠されていたことも指摘しておきたい。デルに資金を提供していたのは企業家であり、弁護士であり、富裕な女性クラブ運動家であった。社会主義を謳い、労働者を支援する一方で企業家に支えられていたことは皮肉である。イーストマンは後世、反スターリニズムを掲げ、大衆作家となり、歴史とした中産階級のオピニオンリーダーとなるが、それは多くの男性知識人がたどった道でもある。政治、経済の中枢に身をおくことは拒否しつつ、左翼に徹することも否定し、教養人として生きる道である。

デルのことばによれば「楽しみ、真実、美、現実主義、平和、フェミニズム、革命」を標榜する『マース』は主

に芸術家を魅了したのであり、芸術上の革命をめざした。ジョン・スローン（John Sloan）、ジョージ・ベローズ（George Bellows）の絵画は偶然にマース誌上で評価されたが、このことは『マース』の階級闘争への武器としての芸術というスローガンと合致した。『マース』はアナキズムのような政治的社会的革命は拒否した。マックス・イーストマンはアナキズムは科学の時代から文学の時代への逆戻りであると批判し、「アナキー」は否定を意味するだけであり、産業社会、民主主義社会をめざす努力をも否定するものであると述べている⁶⁾。

マックス・イーストマンの手により『マース』の発行部数は1万部から時には4万部にまで拡大した。1930年代にヴィレッジの生活を描いたキャロライン・ウェア（Caloline Ware）によれば、1920年代にこの街は一変したということだ。1910年代、社会や政治について批判や問い掛けを発信したコミュニティは1920年以降、地価の高騰にともない解体した。

4 フェミニズム

「フェミニズムは男性にも自由を与える」とするフロイト・デルの宣言は男女が集う改革者たちの共同体から生まれた体験的発想である。ここには「女性の領域」は存在しなかった。1888年にフランスで用いられ、1910年代にアメリカで普及したフェミニズムという言葉は、1910年代に多くの雑誌に登場している。フェミニズムの大衆化を推進した最大の要因は何と言っても女性参政権運動の浸透にある。1890年代に保守、革新を問わず多くの女性団体が女性参政権を支持した。それらの中には女性キリスト教禁酒同盟（Woman's Christian Temperance Union）、女性クラブ（Women's Club）、セツルメントハウス、労働組合などが含まれる。ここに掲げた女性団体はその目標を改革に絞ったのに対し、ヴィレッジフェミニストは文化価値の変革を求めていたため、女性解放のプログラムも多様である。女性参政権運動内部でも保守派フェミニストとエリートフェミニストとの間に確執があった。ハリオット・スタントン・ブラッチ（Harriot Stanton Blatch）は1903年に女性労働組合連合（Woman's Trade Union League）の女性部ともいべき参政権組織「自活女性の平等同盟」（Equality League for Self-Supporting Women）を結成し、女性労働者、専門職女性の連帯を促進した。ブラッチの功績の一つには英国流の戦闘的な戦術を上流階級の女性に知らしめたこと、もう一つには女性労働者に自らが政治変革の主体となるべき有権者となりうるとの認識を与えたことである。また、ブラッチの女性の経済的貢献を参政権要求の根拠とした点は斬新であった。1913年にはアリス・

ポールに (Alice Paul) より議会同盟 (The Congressional Union) が結成され、参政権運動の中に戦闘的手段が持ち込まれた。

『マース』はフェミニズムを標榜して、多くの中産階級の支持を得た。1912年に書かれた「女性参政権」「同一労働同一賃金」の記述は多くのアメリカ人がまだ望む目標とは言えなかったが、理念としての公正さは認められた。マックス・イーストマンは「女性参政権のための男性同盟」(Men's League for Women's Suffrage) を結成し、社会主義者の主張する階級第一主義を批判、「性の平等は他の問題と同化できない」と断じた⁷⁾。しかし、彼は同時に資本主義を打破し、社会主義革命をめざすとし、ウィルソン大統領の革新主義に対しては共感しつつも、改革ではなく革命を求めると主張している。その論「参政権唱道者の告白」の中で、イーストマンは女性の場は家庭と言われるが、1910年の調査によれば5人に1人の割合で女性は労働に従事しているとし、すべての人間は自らの望む生活を実現する権利があると論じた。そして次のように示唆する。

すべての人々の問題は同じ方法によって解決はできない。人間の多様性を認めることだ。それぞれが固有の問題を抱えている。そして固有の解決策がある。これが民主主義である。人間の自由である。すべての人々への参政権が意味するのはこのことなのだ。仮に女性の場は家庭としてみよう。しかし、多くの女性が社会的、経済的状况により女性の場におさまることはできない。しかも、社会が押しつけたドグマにより全うで実りある解決を阻まれている。法のもとでの政治的平等として参政権がある⁸⁾。

イーストマンは女性参政権を求める理由の第一に平等を掲げた。彼はまた、子供の福祉、女性の自己評価の向上をも掲げた。彼は女性が子供を産み、育てるこの世界への知識なしに子供を持つことを批判し、知的な市民を育てるためには母が知的でなければならないと論じた。彼は産児制限についても多くを語っているが、女性参政権を求める根拠に人種の向上のための知性を女性に与えることを掲げた点は優生思想につながるものと考えられる。

ヴィレッジフェミニズムはかつて「男性的」あるいは「女性的」とされていた要素をすべて人間に共通のものであるとし、ジェンダー概念を提起し、男女の友愛を説いた。フェミニズムを彼らは男女についての態度や習慣の完璧なまでの変革と考えた。したがって、参政権は大きな目的のための一つの出発点にすぎず、新しい社会秩序を作るための一つの価値と見なされた。新しい社会秩序とは言うまでもなくユートピア共同体である。そこで階級と性を廃する強力な手段として産児制限が論じられ

た。マーガレット・サンガーのヴィレッジへの移住はこの場が産児制限運動の拠点となることを意味した。また、IWWのエリザベス・ガーレイ・フリン (Elizabeth Gurley Flynn) にとってもヴィレッジとの出会いがフェミニストとしての出発になるが、ここでは論じない⁹⁾。

世紀転換期にシャーロット・パーキンズ・ギルマン (Charlotte Perkins Gilman) が提案した共同住宅は有名であり、女性の隷属の原因は家事、育児の無償労働にあるとするフェミニズムはリベラルクラブのヘンリエッタ・ロッダマンらを魅了した。南部以外では女性の家事に従事するメイドが減少しているという皮肉な現実があり、中産階級の女性の家事、育児の共同化はその現実へのひとつの回答であった。

1910年代のヴィレッジでは個々人の異性関係に変化が生じた。「新しい女」の登場は男がヒーローにならない文化も生んだ。しかし、男たちは「新しい女」を手放しで歓迎したわけではなかった。『マース』のメンバーの関心の中心にセクシュアリティに関わるモラルがある。結婚は公的な制度であるとして自由恋愛主義者はこれを退けた。一方、ハッチング・ハップゴッドは「女性がかつての男性の権利であった自由を所有すること、そして多くの進歩的な男性は旧来の特権を女性が手に入れることを恐れている」と信条を吐露した¹⁰⁾。フロイド・デルも次第にこのようなフェミニズムは反男性であると断じる。彼は、新しい女について「家庭から自由であり、自分たちに近い。人生におけるできごとと直面した時に勇敢であり、軽妙である」と男性との類似点に関心を抱く。しかし、医学の語る「男女の根本的な骨や神経系の違い、頭脳の構造の違い」を学び、「女性が子供を持つことはわかるが、だからといって女性を永遠に政治、知的世界から隔離することは理解できない」と宣言する。「科学を正しいと受け入れざるを得ないが、それを嫌う。ともに外出している女性たちについてそのようなことを受け入れたくない。断じて。しかし、真実には直面しなければならない」と嘆いた¹¹⁾。そして、見られる性としての女性を受容できるが、男性が女性の性の対象となることにはいらだちを見せた¹²⁾。

女性にとって、フェミニズムは社会改革の思想であったが、男性にとっては文化実験であり、「新しい男」を気取るポーズであったというのは酷であろうか。ヴィレッジの文化実験の中心に性革命がある。ヨーロッパの性科学の権威、とくにハヴェロック・エリス (Havelock Ellis) の思想は1890年代にアメリカに移入された。性的存在としての女性が認知され、婚外交渉、政治的意味を持つ自由恋愛が産児制限の紹介とともに現実のものとなった。とはいえ、自由恋愛は世紀転換期においても特

殊なグループの中での実験であった。その中心は北西部、そしてニューヨーク市であり、アナキストの影響力が大きかった地域である。アナキストの男性の自由恋愛思想は同士である女性を性の対象とし、性的関係を持つ自由をフェミニズムとはき違えたものが多い。エンマ・ゴールドマンの言葉、「妻は夫の売春婦であり、主人である夫に従属しているのに対し、売春婦は独立した労働者である」は女性にとってのフェミニズムが現実の闘争であるのに対し、男性にとってのそれは家父長制の新しい形態であることを意味しているのではないか¹³⁾。性についての論議は1920年代以降、性の大衆化と変化し、政治性を喪失した。性の政治の再出現は1960年代を待たなければならない。

マックス・イーストマンは当初、I WWのような急進的な運動に賛同していた。1909年を転機として、彼は社会主義フェミニズムに傾倒していく。1913年、『マース』のテーマは拡大し、戦闘的フェミニズムに位置づけられる産児制限、買春をも論じるようになる。この方針には読者から批判も噴出したが、雑誌は引き続き結婚、離婚、性差別の問題を積極的に扱った。1916年に編集者が産児制限の合法化を支持したことは別稿で述べた¹⁴⁾。

ヴィレッジで刊行された別の雑誌に『リトル・レビュー』がある。マーガレット・アンダーソン（Margaret Anderson）がその編者であったが、彼女は急進的左翼であるとともに詩人であり、作家であった。彼女はまたレズビアンとしてのアイデンティティを公表していることでも注目された。彼女もまたエンマ・ゴールドマンの信奉者の一人であり、ゴールドマンの記事を雑誌に掲載し、自身の芸術もゴールドマンの思想を色濃く投影している。二人の共通点は伝統的な家族関係を否定し、個の尊厳を提唱した点にある。「私にはこの世界で固定した場がない。娘はいない。父は亡くなり、母は私を捨てた。姉妹もいない。二人の姉妹は私を気遣いと思っているからだ。夫はいない。愛人でもない。母になることは決してない」とは彼女の回想である¹⁵⁾。

1915年末になるとアメリカは第1次世界大戦参戦に傾斜していく。ウィルソン大統領の初のスピーチは参戦の可能性を示唆するものであり、社会主義、アナキズム、労働組合運動は国策として排除されていく。アンダーソンのアナキズムとI WWへの共感『リトル・レビュー』への経済的支援の拒否という形で彼女に打撃を与え、その購読者は激減した。一時、彼女はニューヨークを離れ、ミシガン湖のほとりのテントで活動するが、1917年に再びニューヨークでの活動を始めた。そして、ヴィレッジの中でさえ異性愛が強制されている現実に驚愕する。恋人である女性、ジェイン・ヒープ（Jane Heap）とともに

にアンダーソンは嘆き、「私たちは心がなく、不真面目で、情けがないと見られている」と回想している¹⁶⁾。

第1次世界大戦以降、戦争に対する姿勢を巡って分裂が生じた。社会主義者は反戦を唱えていたが、『マース』のメンバーの中には連合国とウィルソン大統領への共感を抱く人々もいた。しかし、多くは反戦を主張している。1917年の開戦以降、反戦派への風当たりは強まった。I WWの労働者をターゲットとした殴打、拷問、脅迫が行われ、銃を突きつけられる人々もいた。ドイツ移民や改革運動家も例外ではなかった。マックス・イーストマンはノースダコタ州で反戦スピーチを行った後にリンチに会った。1917年の国家による反スパイ法、1918年の治安妨害法の施行により反戦を唱える人間すべてを拘留することが決定された。1918年には合衆国議会は外国生まれの革命の唱道者を国外追放することを決議した。1919年、エンマ・ゴールドマンは249名の革命家とともにエリス島からロシアへ追放された。グリニッジ・ヴィレッジでのフリースピーチ運動は不可能となり、リベラルクラブは解体し、ヘテロドクシーは内部の反戦論者が逮捕された結果、愛国主義へと変質していった。1917年に『マース』も左翼雑誌として取り締まりを受ける。そして、破産により廃刊となり、1919年にマックス・イーストマンは姉クリスタルとともに『リバレーター』を刊行する。無邪気に反抗精神を謳い続け、美と革命を同義として芸術家の共感を得た雑誌は共産主義を指向した雑誌へと変化した。

1920年の女性参政権の獲得は法的、政治的勝利である。そのことは一方で、それ以前の女性による改革、平和運動、労働運動、産児制限、左翼運動と新しいフェミニズムとの距離を持たせることになった。グリニッジ・ヴィレッジのボヘミアンの様々な実験は終結した。仕事重視の社会は消費重視の社会へ移行し、改革は人々の夢になり得なかった。以下、クリスタル・イーストマンの思想と生涯について考察したい。彼女の男女平等法（Equal Rights Amendment以下ERAと略す）、平和運動、共産主義ロシアへの傾斜は一人の知識人女性の道のりではあったが、極めて稀で真摯なフェミニストの象徴として捉えられるのではなかろうか。

5 クリスタル・イーストマンとフェミニズム

マックス・イーストマンの姉、クリスタル・イーストマンはマサチューセッツ州マールボロの生まれ、ニューヨーク州で育ち、1903年にコロンビア大学で社会学を専攻した。その後、ニューヨーク大学ロースクールに学び、1909年、ニューヨーク州労働者債権委員会の役職につく。一方、ウィスコンシン州で女性参政権運動のマネージャー

も務める。1911年にウォレス・ベネディクト (Wallace Benedict) と結婚し、ミルウォーキーに移住。しかし、1915年にニューヨークに戻り、結婚生活は破綻した。1916年、ウォルター・フラー (Walter Fuller) と再婚、二人の子供をもうけた。

クリスタル・イーストマンは女性が主体である生き方を常に提唱し、それによって自由に生きる意味を説き続けた。15才のとき、彼女は「女性」と題するペーパーを夏期シンポジウムで発表した。そこには「女性は自分で働かなければならない。幸福への唯一の道はある特定の人間に縛られない人生に関心を持つこと」と述べられている。彼女は家事を「自らは責任を分かち合わない男性のために快適な家を提供する女性の仕事であり、女性のサービス、女性の拘束」と考え、家庭を「男性の意志に従属する自己放棄の場の象徴」と捉えた¹⁷⁾。しかし現状では家事労働に対して賃金を与えることが必要と彼女は考えた。結婚に際しての改姓については「象徴は重要なもので夫の名を名乗ることは従属の最悪の象徴の一つ」とも述べている¹⁸⁾。

彼女はまた熱心な産児制限の唱道者であり、性について、母性について、赤裸々に語っている。「女性は愛、結婚、家事の他に自分の仕事、自己表現の手段を必要としている。この二つの要求をどのように調和させていくかが問題である」とは彼女の本音である。そして、具体的な方策として彼女は結婚、離婚、相続法の改正にその解決を求めた。夫婦は家と家族をともに支える。一方が外で収入を得、他方が家で子育てをする選択はあるが、家庭経営のコストは夫婦双方が維持するというものである¹⁹⁾。クリスタルは女性の服装改革を説き、結婚後の別居を続けることで夫婦は新鮮な関係を保つことができると考えた²⁰⁾。また、子育ては母の仕事であり、科学的な保育を学ぶことが重要であるとする彼女だが、男女は共学であるべきであり、男女を異なった性として育てるべきではないと述べている²¹⁾。彼女は女性が家事育児を選択した場合、それを職業とみなし、正当な賃金を保証するようにすれば依存ではないと主張する。「労働は女性的なことでもあり、家事は男性的なものでもある」と彼女は言う²²⁾。共働きの男性が家事を「手伝う」とはどういう意味か、男性とはパートナーシップが持てないのか、と彼女は言及する。

ニューヨーク州の労働者保障法は彼女の著書「労働災害と法」から生まれた成果であったが、この法が一部の労働分野のみをカバーしているにすぎないことを彼女は批判した。そして、後に労働者を救済する究極の手段として革命を考えるに至る。

クリスタル・イーストマンは1909年に弟マックスに

「女性参政権のための男性同盟」を結成するよう奨励した。二人の両親も女性参政権論者であった。女性参政権は彼女のフェミニストとしてのプログラムの一部ではあったが、1911年にミルウォーキー州でキャンペーンマネージャーを務め、政治平等同盟 (Political Equality League) を指揮した。酒類醸造業者の女性参政権反対に対しては民主主義の前にビジネスを、正義と人権の前にビジネスを重視するものと抗議し、女性参政権に対する無知と偏見を取り除くように主張している。そして Wisconsin 州での敗北については進歩的な共産党員と社会党員の票を過大評価し、醸造業者の女性嫌悪を過小評価したとした。彼女は後に ERA を要求したアリス・ポール (Alice Paul) と1年間行動を共にし、彼女について多くを語っている。ポールは共産主義者でもなく社会主義でもなく、女性のための行動家であること、彼女によりアメリカの女性参政権運動は再生したことをクリスタルは称え、ホワイトハウス前でのピケ、ハンガーストライキなどの行動が運動を活性化したと評価している。一方で、クリスタルは女性保護法を批判し、フローレンス・ケリー (Florence Kelly) やジェイン・アダムス (Jane Adams) から改革者と袂を分かち、後にアリス・ポールの女性党 (National Woman's Party) の主張する ERA を支持した。

1913年、国際女性参政権連盟 (International Woman Suffrage Alliance) がブタペストで開かれ、そこに参加したクリスタルは奇しくも平和運動に目覚める。1915年、女性参政権協会 (Woman Suffrage Alliance) はベルリンで大会を開いた。そこでクリスタル・イーストマンは戦時であろうが女性は連帯すべきであるとし、恒久平和のための女性国際委員会 (International Congress of Women for Peace) を結成した。彼女は女性参政権と恒久平和は平行して実現されなければならないとする。「女性は人類の母であり、人の痛みについて考える。国家に帰属するのではなく人類に、ナショナリズムではなく国際主義を」と彼女は言う²³⁾。その結果、彼女は軍国主義に反対するアメリカ同盟 (American Union Against Militarism) を結成した。

1919年3月に合衆国第1回フェミニスト会議において、未だに5分の4の女性が参政権を持たないことに言及し、「19世紀に獲得すべき自由を得るために社会革命を待たない」と発言したことに注目したい²⁴⁾。このとき、クリスタルは女性の現状について様々な角度から検証している。彼女は、下院には女性議員は1名、州議会には21名、政府の要職についている女性はほとんどいないことを掲げ、また女性陪審員のいる州も6州にすぎず、判事も下級審の6名のみ、さらに同一賃金同一労働は保証されず、

労働組合も女性に開かれていない現状を列挙した。女性の問題は革命により解決されるものではないと自覚しつつ、第1次大戦後、クリスタルはロシア革命への共感を深め、アメリカ民主主義への信頼を失っていった。

前年の1918年、参政権獲得後は男女が共に世界を建設するとし、女性の候補者が出ればと願うとともに、彼女は『リバレーター』誌上でロシアへの共感を一層深めていく。

ロシアの人々がリードすることで世界は産業界の実験となり真の民主主義に向かうことになる。アメリカはロシアに手を差しのべるべきである。それにより世界の進歩は促進される。変化の可能性は今日想像を絶するものがある。この戦争を終結させ、政治、軍事にのみ関心を奪われている人々には夢想だにできない人類の幸福と自由の時代を開くために私たちは手を取り合い、声を掛け合っていかなければならない²⁵⁾。

『リバレーター』の発刊の目的としてクリスタルは労働と社会主義を掲げる。一方で、女性の完全な自立、人種間の平等、リンチ反対、産児制限の普及も掲げる。あらゆるドグマや硬直さからの解放を掲げる。しかし、社会主義を全面に押し出しているため、女性解放のプログラムその他が具体的にどのような社会主義社会実現のプロセスの中で解決されるかのビジョンに乏しい。また彼女は戦争を「国際共産主義と帝国主義」に由来するとし、「自由への闘争はロシアから西欧諸国に広まる」と論じている²⁶⁾。

クリスタル・イーストマンはアメリカ社会党内部が百パーセント合衆国憲法を遵守する立場と政治的民主主義によっては自由は獲得できないとする立場に分裂していることを指摘している。彼女はアメリカ社会党が経済的な拠点を失い、民主主義政治への批判を忘れ、マルクス主義以前の文献である憲法や独立宣言を持ち出し「旧来のアメリカ主義」に墮しているとする。ユージン・デプスの党首選出を唯一の革命と考えた彼女の演説は1919年8月の『リバレーター』誌上でも紹介されている。資本主義は投獄者を生み、その中にはウィルソン大統領批判、反戦に身を投じたデプスもいたと彼女は述べ、世界を救うための革命を主張した。

クリスタル・イーストマンはフェミニズムとパシフィズムを融合する。1915年に女性平和党（Woman's Peace Party）の党首に、1916年には軍国主義に反対するアメリカ同盟の委員となり、女性票は戦争に反対し、女性の政治参加は平和につながると説いた。しかし、ロシア革命に深く共鳴していく中で、ジェイン・アダムスからは革命的すぎると批判される。社会主義者として、政府の戦争についての政策には抵抗し、ヒューマニスト

として非武装を唱え、『マース』の廃刊後は言論弾圧の中で、「女性の自由会議」を1919年3月に組織した。その後、ハンガリーでの共産主義の成功を見て、社会主義とフェミニズムは共存すると実感する一方で、アメリカにおいては法改正のような改革を主張し続けた。

『リバレーター』の刊行時頃から、フェミニスト、平和主義者は彼女と袂を分かった。彼女がヴィレッジの文化に重点をおいた改革からより政治的な方向へ転向していくにつれて、ヴィレッジのコミュニティーも解体していった。女性参政権獲得後の1923年6月、ブタペストの会議から10年を経て、クリスタル・イーストマンは女性の経済的自立を支持すべきとし、男女の双方の収入と財産を認め、子育て中の女性に対しては夫の収入の一部を妻の賃金として認めるべきと論じた²⁷⁾。

1925年9月、18カ国の社会主義女性がマルセイユに集った。会議での決議にはあらゆる国々の社会党が労働団体や社会主義運動の中に女性を組織することが重要であることが盛り込まれた。そして、社会党は女性の完全な解放を政策の第一に掲げるべきことが謳われた。家族法、市民権、結婚に関して男女は平等であるべきであり、また嫡出の有無を問わず、子供は平等であるべきことも決議に採択された。女性は未婚既婚を問わず、専門職、管理職に就くべきことも提案された。社会主義運動が女性の要求に沿うべきことも明記され、また労働者の保護の一環として母と子供の保護も提案された。そして、次のことば「社会党が真摯に女性の平等を従属的な問題ではなく、政治的な便宜主義でもなく、政策の第一と決定したときに初めて、男女は別の存在であることを止めるであろう」という提言にマルセイユの女性はすべて賛同したとクリスタル・イーストマンは伝えている。

彼女は社会主義に以前にも増して共感を抱くようになる。1920年代のフェミニズムは女性保護法支持者とE R A支持者に分裂した。クリスタルは「多くの専制が保護の名のもとで行われている」とし、E R Aを支持する。保護法は女性への平等の機会をさまざまに同一労働同一賃金はあらゆる職種において確立されなければならないと彼女は確信する²⁸⁾。1923年、国際参政権協会は女性党とその関連団体の加盟を拒否した。「もし女性党に賛成するなら、それは未来への賛成票である。もし反対するなら、それは過去への票だ」と女性党の加入問題についての投票のために結集した代表者の前で挑戦した女性がいた。女性党員はこの女性を昼食に招待した。女性党党首ベルモント（Belmont）はそこでフェミニストとしての国際交流を深めることができたと感じた。英国の戦闘的フェミニストは女性党拒否の理由として、フェミニストより改革者が女性運動の中で多数を占めていること

を指摘した。

イーストマンは英国の女性の状況についても多くを論じているが、その一例として英米両国においてペンキ職人から女性が排除されていることを掲げ、保護法は労働組合から女性を閉め出す口実となっており、女性の労働権を剥奪するものであり、女性に投票権が認められているならば女性がペンキを塗ることができるかどうかは女性の判断にゆだねるべきとしている²⁹⁾。彼女は女性の深夜業禁止の例外が看護婦であり、同じ深夜業でも賃金が高い職種から女性は除かれていると論破する。アメリカにおいてE R Aは女性労働組合連合(Woman's Trade Union League)を含むすべての改革者により批判されているが、専門職に就く女性の中には賛成派が多いことの矛盾を彼女は喝破する。1920年代の状況を概観しつつ、参政権については手段の差こそあれ目標は一致していたフェミニストと改革者が今や原則において対立していると彼女は考えた。彼女はE R Aを支持し、E R A支持の女性党の候補者を支持すると言明した。E R Aは男性の女性への態度を変革させるのみならず、女性の他の女性への意識をも変える効果を持つと彼女は論じ、アメリカでは女性議員が他国に比べて少ないことを掲げている。E R Aが女性参政権の次に来る目標と彼女は考えた³⁰⁾。

1920年代のフェミニズムの衰退の原因の一因に女性間の対立を例示する研究者は多い。しかし、参政権という政治的権利獲得後、女性性とは何かという疑問が再提出されたと考えることもできよう。女性は男性と同じなのか、あるいは異なるのか、同じであるならばすべての面での同一の権利と義務があり、異なるならば、どのような手段を用いて実質的平等を実現できるのかという問題の提示である。したがって、イーストマンの述べるようにフェミニストと改革者との原則における対立があるというよりも、男女が対等な存在であるためにはどうすべきかという手段の対立があったと見るべきであろう。男女は異なる存在であるという言説は女性差別的な形で現れたこともあるが、女性にプラスに作用したこともある。二つの言説は第1派フェミニズム、第2派フェミニズム、そしてそれ以降においても常に登場する。

クリスタル・イーストマンの思想はヴィレッジの生活から生まれ、コミュニティー内に留まらず、広く将来の社会改革に向かったことが特徴的である。彼女は自己変革と新しい女を実践するに留まらず、参政権、セクシュアリティ、産児制限を説き、労働者階級の女性を支援し、平和運動に身を投じ、資本主義システムに疑問を投げかけた。その多岐に渡る活動には目を見張るものがある。1910年代はちょうど新世代の参政権運動家が活躍し、一方で移民者を中心とした社会主義フェミニズム、アナ-

キストフェミニズムが開花したときであった。エンマ・ゴールドマン、マーガレット・サンガーが各々、アナキストフェミニスト、産児制限運動家の代表として評価されているのに対し、イーストマンの活動と思想は比較的注目されて来なかった。しかしながら、クリスタル・イーストマンは参政権運動家の現実的実践の要素とラディカルな活動家の革命的な社会再構築の要素とを併せ持ち、それらを融合したヴィレッジフェミニストの中でも傑出した人物であったといえよう。

註

- 1) Hutchins Hapgood, *A Victorian in the Modern World* New York 1939 p318.
- 2) Christopher Lasch, *The New Radicalism in America, 1889-1993* New York 1965 p149.
- 3) Judith Schwarz, *Radical Feminism of Heterodoxy* Lebanon N.H., p13.
- 4) Lois Palken Rudnick, *Mabel Dodge Luhan: New Woman*, New Worlds Albuquerque 1984 p88.
- 5) William O'Neill ed., *Echoes of Revolt: The Masses 1911-1917* Chicago Quadrangle Books 1966 p6.
- 6) *The Masses* March 1913 in O'Neil p47
- 7) Max Eastman, Editorial, *Masses*, Jan. 1913 p5.
- 8) Max Eastman, Confession of a Suffrage Orator, Nov. 1915 in *O'Neil* pp201-205.
- 9) 拙論「1910年代のアメリカフェミニズムとラディカリズムー産児制限運動の思想的側面について」相模女子大学紀要 1991年 VoL55 pp97-107.
拙論 *Women in Progressive Era: The Issue of Birth Control in the 1910s and After*
岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 創刊号 pp1-26.
- 10) O'Neil p21.
- 11) O'Neil p200.
- 12) Floyd Dell, *Home Coming* New York :Farras &Rinehart 1933 p233.
- 13) Emma Goldman, "The Trafic in Women" in *Anarchism and other essays* Dover Publishing I NC New York 1969 p179.
- 14) 拙論「1910年代のアメリカフェミニズムとラディカリズム」
同*Women in Progressive Era: The Issue of Birth Control in the 1910s and After*.
- 15) Margaret Anderson, *My Thirty Years' War* New York 1969 p79.

- 16) Ibid., p154.
- 17) Crystal Eastman, "Is Woman's Place the Home?" *Equal Rights* June 13 1925.
in Blanche Wiesen Cook, *Crystal Eastman On Women & Revolution* Oxford University Press 1978 p100.
- 18) Crystal Eastman, "Who Is Dora Black?" *Equal Rights* June 5 1926 in Cook p117.
- 19) Crystal Eastman, "Pandora's Box, or What is Your Trouble?" manuscript in June Sochen, *Movers and Shakers American Women Thinkers and Activists 1900-1970* Quadrangle The New York Times Book Co. 1973 p51.
- 20) Crystal Eastman, "Marriage under Two Roofs" *Cosmopolitan* December 1923 in Cook, p77.
- 21) Crystal Eastman, "Bertrand Russel on Fringing up Children An Interview with the Noted Author of 'Education and the Good Life'" *Children: The Magazine for parents* March 1927 in Cook, p92.
- 22) Crystal Eastman, "Now We Can Begin" *The Liberator* December 1920 in Cook, p53.
- 23) Crystal Eastman, "Now I Dare to Do It" An Interview with Dr. Aletta Jacobs, Who called the Woman's Peace Congress at The Hague " *The Survey* October 9 1915 in Cook p240.
- 24) Crystal Eastman, "Feminism" A Statement Read at the First Feminist Congress in the United States, New York. March 1 1919 in Cook, p51.
- 25) Crystal Eastman, "Editorials, Introductory issue of The Liberator" *The Liberator* Vol.I. No.I. March 1918 in Cook p290.
- 26) Crystal Eastman, "The Allied Intervention in Russia and Hungary" unsigned editorial, *The Liberator* June 1919 in Cook p300-301.
- 27) Crystal Eastman, "Suffragists Ten Years After" *The New Republic* June 27 1923 in Cook p132-134.
- 28) Crystal Eastman "Equality or Protection" *Equal Rights* March 15 1924 in Cook p156.
- 29) Crystal Eastman "Recent Developments in England" *Equal Rights* January 22 1927 in Cook p 213-214.
- 30) Crystal Eastman, "Feminist for Equality, Not Women as Women" *New York Telegram and Evening Mail* October 31 1924 in Cook p368-371.